

連載50回を迎えて

文・小西 一三
 絵・小西 由紀子

平

成4年に連載が始まった「漚語り」は今回で記念すべき50回目。自性心は年に2回の発行なので25年間も続いたことになりました。今回は50号を記念して自性心に境内逍遙などをお書きになつている石川久悦先生とご住職に語っていただきました。

石川

よく続きましたね。回数もすごいと思いますが、それ以上に話をしてくれた人の範囲の広さがすごい。例えば漚の漁業でも水 downstream やシジミ漁などさまざまな漁があります。それら漚の漁の様子をそれぞれの漁師さんの話で紹介しているし、船大工さんやつくだ煮屋さんの話もある。子どもの頃の思い出を語ってくれた人もいます。50回すべて読めば、干拓前の漚のおおよその姿は分かると思います。

住職

どんなテーマでどんな方に話を聞けばいいか、テーマの決定と人選には迷いました。最初の頃はテーマも候補者もたくさんいたので楽だったけど後半は苦勞した。頼りになったのは地元の話。ページをめぐって名前を見るとその人の顔と仕事がいかに浮かびます。漁師さんだけに偏つてはいけないし、地区も偏らないようにバランスをとったつもりです。その電話帳ですが、途中まで見て決まればいいけど、結局決まらず、最後までページをめぐったこともよくありました。

一つのテーマで数人の顔が想い浮かんだ時は石川先生にご相談。さすが石川先生はよくご存じで、このテーマなら誰がいいとか、あの方が詳し

いとか的確なアドバイスをいただきました。

石川 全ての人たちに共通していたのは漚への愛情で、読んでいて嬉しくなりました。とにかく干拓前の八郎漚は暮らしを支える大人たちの仕事場であり、子どもたちにとっては遊びの場でもあったから。

子どもの頃の思い出を読むと、ほぼ全員が漚で水に親しみながら泳ぎを覚えていきますよね。大人は仕事で忙しいから子どもたちの監視なんかしてられない。中学生などの年長者が年下の子どもたちを指導し、最初は浅い所で遊ばせる。少し泳げるようになると徐々に深い場所で泳がせ、事故がないように監視もしていた。いい上下関係が保たれていたんですね。

干拓前の漚は水が本当にきれいでした。私が忘れられないのは、八竜橋の上から釣りをしたこと。その頃はとにかく水が澄んでいましたから橋の上から水底がしっかりと見える。グンジがエサに食いつくのを見てから竿を上げていましたから……(笑)。今、橋の上から水底が見えますか？それほど干拓前は水がきれいだったということです。

住職 私も子どもの頃、八竜橋の上からショウブ(サヨリ)釣りをしたことがあります。ショウブが回遊してくると橋の上は竿を下ろす人たちで大賑わい。それこそ天王側から船越側まで夏になると釣り人でびっしりでした。

石川 ところでご住職は漚にまつわる思い出の中で、最も心に残っていることは何ですか。

住職 二つありますが、その中の一つが漚の豊かさを象徴した遊び、グンジ踏みです(笑)。私は中学を卒業した16歳から9年間、東京で学び修行してきましたが、時々、学校の友だちとふる里の話をしたものです。その時、グンジ踏みの話をすると誰も信用してくれなかった。そんなにハゼ(グンジ)がいるはずはない、ましてや子どもが足でハゼを踏んで捕るなん

て信じられなかったでしょうね。「潟語り」の中でも何人かの人がゲンジ踏みについて語っていましたが、その記事を当時の友だちに見せてやりたいと思いましたがね。

も う一つは、戦時中の学童の集団疎開。東京は向島にある寺島小学校の児童たちが、お寺に来て集団生活をしていた。その頃私はまだ生まれていませんが、母からよく聞かされましたし、お寺には疎開に関する資料も残っていますので強く印象に残っています。

戦後しばらくして大人になった人たちが時々お寺を訪ねてくれるようになって、母なんかとよく当時の思い出話をしていました。はるばる東京から当時のお札に訪ねてきてくれる人たちの話を聞いていると、地域の人たちとお寺の関わりについて深く考えさせられましたし、そのこととお寺の運営方針に大きな指針を与えてくれたと思っています。

石川 「潟語り」は今後どうなりますか。

住職 人物にスポットを当て、思い出を語ってもらう「潟語り」は今回で終了にしようと思っています。次回からは潟の歴史や風物、民俗、動植物など、より幅広い視点から潟について掘り下げるような企画を考えています。

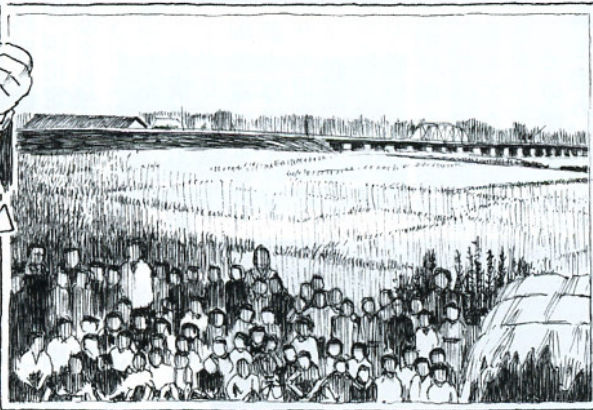
また、今年度中に「潟語り」50回分に昔の潟の写真などを加えた本を作って、檀家の皆さまに配布できればと考えています。

石川 それはいいですねえ。もう潟を昔の姿に戻すことはできないけれど、その姿は孫子の代まで語り継いでいかなければいけません。そして、それをよすがに、少しでも昔の姿に近づけていくことはできると思います。例えば水質の改善や湖岸の風景の復活です。すでに取り組んでいる方々もありますが、その運動をもっと広げていきたいですね。きっとその本は大きな力になってくれるものと思います。

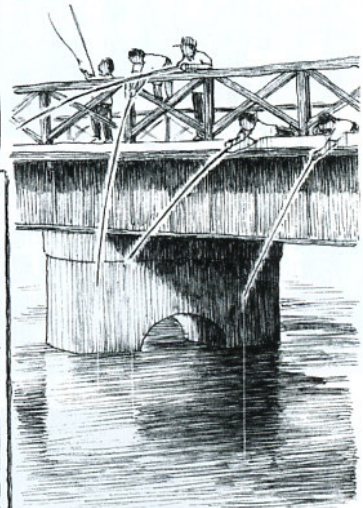


鈴木住職 (68)

疎開児童の話は母からよく聞かされて心に刻まれています。この記念写真は広々とした田んぼと八竜橋と潟を背景に撮ったものです。潟の豊かな風景は子どもたちの心の支えにもなったんじゃないかな。



懐かしさに話がはずむお二人



石川久悦さん (80)

八竜橋といえば、橋の上でうづせになって水面を見て釣りをしたものです。水がとても澄んでいてゲンジが泳いでいるのがよく見えました。その目の前に糸をたらすのですから良く釣れました。